

日本独文学会

2021 年 春季研究発表会

研究発表要旨

リアルタイム質疑応答

6月5日（土）・6日（日）

参加費：無料

(学生を含め一般非会員は1,000円 ※要事前申し込み)

オンライン開催

目 次

第1日 6月5日 (土)

シンポジウム I (14:30~17:30) チャンネル1 5

「アヴァンギャルドの運動表象」

Darstellungen der Bewegung in der Literatur und Kunst der historischen Avantgarde

司会：小松原 由理

- | | |
|------------------------------|--------|
| 1. 未来派の「速さ」をめぐる運動表象について | 和田 忠彦 |
| 2. 表現主義の運動美学 | 西岡 あかね |
| 3. 表現舞踊における「動き」の概念 | 山口 庸子 |
| 4. バウハウス舞台芸術工房における「運動表象」の法則化 | 柴田 隆子 |
| 5. ダダと表現舞踊の「あいだ」 | 小松原 由理 |
| — ゴッホ・トイバーの運動表象 | |

シンポジウム II (14:30~17:30) チャンネル2
9

コスモポリタンのナラティブ

Kosmopolitische Narrative

司会：磯崎 康太郎

- | | |
|--------------------------------|--------|
| 1. 「永遠平和」への道 | 菅 利恵 |
| — ヴィーラントからカントへ | |
| 2. 「世界文学と人間性」あるいは「多様性における統一」 | 西尾 宇広 |
| — 19世紀におけるコスモポリタニズム言説の一類型をめぐって | |
| 3. 「世界市民主義」とフォンターネ『エフィ・ブリースト』 | 磯崎 康太郎 |
| 4. コスモポリタンの生活形式としてのアメリカ | 山室 信高 |
| — トーマス・マンのコスモポリタニズム思想とアメリカ亡命 | |
| 5. 亡命が遺したもの | 吉田 治代 |
| — レーヴィットとブロッホのコスモポリタニズム | |

ポスター発表 (13:00~14:30) チャンネル3..... 13

(ポスター発表は途中での出入り自由です)

MEDITATIONSÜBUNGEN UND IHRE AKZEPTANZ IM UNIVERSITÄREN

DEUTSCHUNTERRICHT IN JAPAN

Luisa Zeilhofer

ブース発表 (14:35~16:05) チャンネル3.....14

(ブース発表は途中での出入り自由です)

「生徒の資質・能力を育成するための授業設計 とその評価」 — 逆向き設計を取り入れたパフォーマンス評価の効果

Die Unterrichtsplanung und die Evaluation zur Entwicklung der Kompetenzen und der Fertigkeiten von Deutschlernenden an der Oberschule -Die Effektivität der auf der Rückwärtsplanung basierten Leistungsevaluation

池谷 尚美・吉村創・鈴木 冴子・境一三

口頭発表：語学 (16:10~17:25) チャンネル3 14

司会：森 芳樹／稲葉 治朗

1. 1840 年から 1945 年に至るドイツの日常的「文字景観」 大倉 子南
— 書籍・新聞・雑誌 におけるドイツ文字とラテン文字の使用実態を探る
2. 低地ドイツ語における疑似並列構文について 覚知 頌春

シンポジウム III (10:00~13:00) チャンネル1 16

Edition から Dokumentation、そしてその先へ —編集文献学の射程—

Edition, Dokumentation – was kommt danach? Zur Reichweite der Editionsphilologie

司会：明星 聖子

1. 史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe) とは何か
— ジークフリート・シャイベの理論を中心に — 森林 駿介
2. フリードリヒ・シュレーゲルの遺稿断章群とその編集・出版の歴史
— ヴィンディッシュマン、J・ケルナーから E・ベーラーへ — 二藤 拓人
3. 書物の「その後の生」とはなにか
— ベンヤミン『1900年ごろのベルリンの幼年時代』編集・出版を例に— 田邊 恵子
4. ヘルダーリンに見る史的批判版 矢羽々 崇
5. 「翻訳可能なテキスト」としての新しいカフカ編集の可能性 明星 聖子

口頭発表：ドイツ語教育 (10:00~12:35) チャンネル2..... 20

司会：Stefan Keppler-Tasaki / 高田 梓

1. Geschlechtergerechte Sprache: Warum sich auch der DaF-Unterricht in Japan damit beschäftigen sollte Angela Lipsky
2. 日本国内におけるドイツ語学習者の Willingness to Communicate: 授業内要因と個人差要因の視点から 山田 真実
3. Sprachhandlungen modellieren für Deutsch als Fremdsprache. Ergebnisse einer korpuslinguistisch-frequenzbasierten Studie zur Distribution und Verkettung sprechaktindizierender Muster Joachim Scharloth
4. Sehen und Sprache - die Vorteile binokularen Sehens für den Spracherwerb (Deutsch /Englisch) Markus Rude / Will Hall

口頭発表：文学 I (10:00~12:35) チャンネル3..... 23

司会：竹峰 義和 / 葛西 敬之

1. クレメンス・J・ゼッツ『ケーファイと文学』からみるポスト真実時代の第四の壁 犬飼 彩乃
2. 大学生像の変遷 小崎 肇

- グリュウフィウス『カルデニオとツェリンデ』とアルニム『ハレとエルサレム』
から
3. 『ミツバチ・マーヤの冒険』における「ミツバチとスズメバチの戦い」について
— 戦争とベストセラーのかかわりに関する一考察 竹岡 健一
4. Literarische Wahrheit zwischen Fakt und Fiktion. Ein Bestimmungsversuch. André Reichart

第1日 6月5日(土)

シンポジウム I (14:30~17:30) チャンネル 1

「アヴァンギャルドの運動表象」

Darstellungen der Bewegung in der Literatur und Kunst der historischen Avantgarde

全体要旨

司会：小松原 由理

ヨーロッパにおける、いわゆる歴史的アヴァンギャルドの諸潮流のなかで、「運動」や「スピード」に関わる表象は重要な綱領的意味を持っていた。イタリア未来派が古典的芸術の「不動性」への抗議として「スピードの美学」を謳ったことはよく知られているが、ドイツ表現主義の綱領や芸術実践においても「動き」というイメージは重要な役割を果たしていた。その際、「運動」概念は、文学、美術、演劇、舞踊、造形などの諸ジャンルを横断しつつ、多様なダイナミズムを伴う表現を生み出した。このような「運動」表象のジャンル横断的な伝播は、表現主義に限らず同時代のドイツ語圏アヴァンギャルド全般に広く見られた現象であった。従って、前衛芸術の中核的原理として運動表象を論じる際には、従来の研究では必ずしも重視されてこなかった、ジャンル横断的な研究視点が不可欠となる。逆に言えば、運動概念を軸としてエリア横断的視点を取り入れることで、ヨーロッパ全域に広がる現象であったにもかかわらず、語圏文化の限定的な枠内で論じられることの多かった、前衛芸術を語る言説を再編成する可能性も見てくるだろう。

本シンポジウムでは、以上のような問題意識に基づき、イタリア未来派のドイツ語圏への受容という側面を切り口とし、運動表象がいかに関々の運動において受容され、多様な「動き」のイメージを生み出したのかに注目することで、ドイツ語圏のアヴァンギ

ヤルド運動における「運動」や「スピード」という原理に対するアプローチの独自性を明らかにしていきたい。このような意図のもと、和田忠彦氏を発表者の一人として迎え、イタリア未来派の運動美学及び運動表象について、その具体像及び同時代的な問題意識を全体共有する機会を得たい。和田氏の発表を受け、表現主義、表現舞踊、ダダ、バウハウスを専門とする各発表者は、それらが各運動内で、どのように具体化されたか、そして、各運動の枠を超え、どのように重なり、共有され、また連動性を示したかを具体的に論じていく。

同時に、本シンポジウムでは、運動表象のいわば実践的な担い手となった女性芸術家、すなわちパフォーマーたちの存在にも注目したい。具体的には、パフォーマンスアート分野においてはしばしば女性芸術家たちが身体運動の主体であると同時に男性芸術家の生み出した運動イメージの媒介者ともなっている点にも注目し、一つの運動表象内におけるジェンダー差異のせめぎあいにも光を当て、運動表象の問題系統にジェンダーがどのように関係していたかについても重要な論点の一つとしたい。

1. 未来派の「速さ」をめぐる運動表象について

和田 忠彦

「未来派宣言」(1909.02.20付「フィガロ」紙)をもって嚆矢とする人類初のを、イタリアの近代化と感覚変容の文脈に位置づける作業の一環として、未来派の前史を跡づける。G.ボルディーニやG.プレヴィアアーティの絵画にみられるリアリズム、象徴派・分離派のデカダンスといった明確に〈受容(=需要)者〉の想定された表現のありようが支配的な状況のなかで、はどのように胚胎されたのかをみる。その傍証として、蒸気機関車にはじまり自動車、飛行機へと拡大する「速さ」という主題をめぐる表象(絵画、彫刻、写真、映画、音楽)の変遷を確認する。

次いで「未来派絵画技術宣言」(1910)に署名した5名の画家、ベルクソンの現象学を絵画・彫刻に〈翻訳〉したボッチョーニ、実直なキュビズムの実践者カッラ、平面から音による彫刻へ踏み出すことで時間の加速を試みたルッソロ、視覚フラッシュとしての身体感覚と記憶を平面に埋め込んだバッラ、ダンスの美的運動の感覚沈潜を点の集合たる色彩に込めたセヴェリーニと、著しく統一性を欠く美学的来歴をもつ表現者たちの共通主題「速さ」を同定する。

以上の作業は、国家統一運動前後から未来派の誕生と展開、さらにはファシズム運動／体制との反目と共振／妥協まで、「速さ」をめぐる表象が(映画や写真という新手法を得て)蒙る変化(と感覚の変容)を跡づけることを可能とする。

2. 表現主義の運動美学

表現主義の文学において、何らかの運動性や速度の感覚を喚起するようなイメージや表現が重要な意味を持っていることは、これまでの研究でもたびたび指摘されてきた。その際、この表現傾向は、近代都市に対する不快感や違和感、疎外感といった、表現主義の近代批判的態度との関連で論じられることが多かった。しかし、表現主義の綱領においては、運動やエネルギーの爆発的なイメージが、旧来の芸術形式に対する破壊的姿勢を伝えるとともに、バイタリズム的世界観や文学の政治化とも関連しつつ、「精神」概念のマニフェスト化につながっており、この文脈において、その技術批判的傾向が強調されがちな表現主義も、イタリア未来派と同様、近代技術の生み出すスピードや運動のイメージに強い関心を寄せていた。

以上に述べたような問題を背景として、本発表ではまず、表現主義の作家たちのイタリア未来派受容も踏まえながら、その運動美学を再考する。具体的には、イタリア未来派とも共通する、技術／機械のバイタリズム的、あるいはアナーキズム的解釈が、表現主義の力動的な表現様式の中でどのように具体化されているか論じる。さらに、芸術表現におけるダイナミズムの要求から発して、表現主義の芸術家たちが、従来の「作品」の枠を超えた、実際に身体の動きを伴うパフォーマンスへの移行をどのように模索したかにも触れたい。

3. 表現舞踊における「動き」の概念

山口庸子

本発表では、ドイツ語圏のモダンダンスである「表現舞踊Ausdruckstanz」における「動きBewegung」の概念と表象を、イサドラ・ダンカン、メアリー・ヴィグマン、ヴァレスカ・ゲルトを例に分析する。

ダンカンとは、未来の舞踊家において、「魂の自然な言語が、肉体の動きになる」とした。心身一元論的なその動きは、「風」や「波」などの自然の動きとも連動し調和するものであった。ダンカンの影響は大きく、戸外で踊る女性舞踊家の、波打つような流れるような動きは、多くの映像や写真に認めることができる。

ヴィグマンは、踊り手である女性の身体とその内的な欲望を、踊りの動きの起点に位置づけた。ヴィグマンの舞踊解釈で興味深いのは、動きが葛藤から力動的に生じ、「格闘する」「強いる」など、ある種の暴力性を示唆する語彙で語られる点である。それが、彼女の舞踊の緊張感のある動きの産出に関わっていると思われる。

ゲルトが題材としたのは、同時代の「日常の動き」であった。また動きの階層性にも敏感で、「娼婦」など社会的マイノリティに着目した。特に、ゲルトの顔の動きは注目に値する。それは、ダンカンのギリシア彫刻的な顔や、ヴィグマンの仮面的な顔に対する

アンチテーゼであり、また規格化された美を求められるようになった、同時代の女性たちの顔と身体へのアンチテーゼでもあると解釈できるからである。

4. バウハウス舞台芸術工房における「運動表象」の法則化

柴田 隆子

バウハウスの基礎教育課程全般で検討されていた「運動Bewegung」の現象形態を、身体実践の面で取組んでいたのは舞台芸術工房であり、その理論構築をしたのは「表現主義演劇」を提唱していたロター・シュライアーであった。本発表では、運動表象としての身体に着目した彼の論考や2代目マイスターとなったオスカー・シュレンマーの理論実践を検討することで、「運動」を法則化することで舞台上に見える形で示した方法論を明らかにする。「身体的・心的・精神的」の三つの統一として人間の「動き」を捉えるシュライアーは、人間の感覚に作用する「形体」「色彩」「音」「動き」を舞台の構成要素に挙げ、その相互関係を理論と舞台進行表で示し、舞台化を試みた。シュレンマーはより具体的に衣装の法則として図式化して捉えることを提案し、実際に「運動」の法則を形態化した衣装を制作している。舞台芸術工房では他の工房で扱う「金属」や「ガラス」「織物」などの素材をテーマとした「ダンス」を習作しており、「身体」も素材のひとつと考えられた。舞台上で「金属ダンス」や「ガラスダンス」を演じた女性パフォーマーや衣装制作に関わった女子学生らに関する最近のバウハウス研究にも触れながら、「新しい人間」を考えるバウハウスがジェンダーの観点からもより開かれた可能性の場であったことを合わせて報告する。

5. ダダと表現舞踊の「あいだ」—ゾフィー・トイバーの運動表象

小松原 由理

ダダと表現舞踊の関係性が今日新たに注目されている。Mona De WeerdとAndreas Schwab共編による„Montedada. Ausdruckstanz und Avantgarde“(2018)に示された研究成果は、ダダ生誕100周年を契機に、さらなる研究が進んだことと同時に、パフォーマンスや身体文化の文脈からの両運動への関心が高まっていることを明確に示している。こうした文脈において、本質的に越境的な運動本来の方向性が改めて意識化され、その流れにおいて実は運動における主体的な役割を担っていた女性芸術家の存在が続々と発掘されている。

本発表で取り上げるのは、そうした流れを受けて再注目されている人物の一人であり、ダダの舞踊と表現舞踊の「あいだ」という、特殊な位置付けに立つ芸術家ゾフィー・トイバーとその表現活動である。ラバンの生徒でありながら、ダダの舞踊家としても舞台に立つことで、彼女は二重の運動方向を体現していた。本発表では、その事実を具体的

に検証し、彼女の運動表現を例外としてではなく、むしろダダと表現舞踊の潜在的な共通性を語る上での例証と位置づけたい。トイバーは運動そのものを、自らのパフォーマンスとしてのみではなく、手工芸の制作とその装飾、人形制作やインテリアデザインといった応用芸術へも展開させている。いわば理念としての閉じられた「運動」を、生活空間へと実践的に結びつけるトイバーの営みのなかに、アヴァンギャルドの運動表象の体現者としての姿を捉えなおしたい。

シンポジウム II (14:30~17:30) チャンネル2

コスモポリタンのナラティヴ

Kosmopolitische Narrative

全体要旨

司会：磯崎 康太郎

『カントと永遠平和』(1997:2006) 所収の論文の中で、マーサ・ヌスバウム は、コスモポリタニズムを「世界的規模の共同体」のための実践の糧と見なしつつ、それが「ある種の暖かさと安心」を手放した「際限のない孤独感」とも結びつくことに言及した。世界市民としての生は、習慣や境界線など人のよりどころとなる支えを手放すことによってこそたらされ、だからそれは「結局のところ (...) ある種の亡命」にほかならないという。

ホミ・バーバも、孤独な陰影を帯びたコスモポリタン像を提示している。故郷で身に刻まれた文脈を抱えて、なじみのない場所で新しい文脈を紡ぐ人々を描いた文学作品を引き合いに出しながら、彼は、人が自らの置かれた場所とかならずしも適合しない文脈を抱えもって生きることに積極的な意味を与えようとし、それをヴァナキュラー・コスモポリタニズム と呼んだ。(『ナラティヴの権利』2005:2009)

本シンポジウムは、コスモポリタンのナラティヴの要を、コスモポリタニズムという言葉から通常想起される文化横断的な自由さよりもむしろ、「特定の社会や文化に包摂されない生のための思考」という点にこそ見出す。18世紀後期から20世紀前半のドイツ語圏において、コスモポリタンのナラティヴが「よそ者 Fremdling」としての存在形態を足場にして展開したさまに光を当てる。

まずカントのテキストを手がかりに、「よそ者」のための思考としてのコスモポリタニズムが啓蒙の知識人の拠点として育まれたことを示した上で、19世紀以降の展開に目を向ける。19世紀を通して、国民国家と不可分に結び付く形で〈われわれ〉の枠組み

が強化され、ナショナルな統合がうながされたが、その中で〈われわれ〉に包摂されない生を肯定するコスモポリタニズムの発想は、どのように残されたのだろうか。ドイツ帝国誕生後にますます強化された中央集権的な力学と、それはどのようにせめぎあったのか。さらに 20 世紀に入り、この力学が露骨な暴力装置に転じたとき、これに飲み込まれないための、またこれと対決するための足場として、コスモポリタニズムはどのように機能したのか。〈われわれ〉から身を離れた亡命者たちは、コスモポリタニズムを手掛かりに、どのような思考を新たに打ち出したのだろうか。

難民の権利擁護を含んだバーバの議論や、国際経済援助を打ち出すヌスバウムの論考とは異なり、本シンポジウムで光を当てるナラティブは、国や文化を超えて個々の生を支える実践に、直接取り組んだものではない。それでもそれは、「よそ者」の生の不安定さに根ざした批判的思考のラディカルな表現であり、その点で、現代の実践的なコスモポリタニズムにつらなる水脈の確かな一部をなしている。この水脈を一部なりとも示そうとする本シンポジウムの試みは、個々人のコスモポリタンとしての存在形態を、またこの存在形態に根ざした文化を、活性化させる一助になるものとする。

1. 「永遠平和」への道—ヴィーラントからカントへ

菅 利恵

パウリーネ・クラインゲルトの“Kant and Cosmopolitanism –The Philosophical Ideal of World Citizenship“ (2012) は、カントのコスモポリタニズムを 18 世紀の言説の中に位置付けて論じた数少ない研究書である。ここでは従来啓蒙時代のコスモポリタニズムに向けられてきた懐疑的なまなざし、すなわちそれを当時の孤立した知識人たちの観念的な現実逃避だったとする評価が、明確にしりぞけられている。

本発表もまた、18 世紀後期のコスモポリタニズムをたんなる消極的な観念主義とみなす立場はとらない。ただ、当時のコスモポリタニズムの「愛国的な」側面を強調したクラインゲルトとは異なり、ここではむしろそこに見落とし難く存在した離脱への傾向、現実社会にあえて背を向けようとする基本姿勢にこそ重きを置く。18 世紀後期のコスモポリタニズムは、現実社会に組み込まれていない領域の確保を意識的に目指し、そのような場所にこそ道徳的、社会的な意義を見るものであった。本発表では、まずヴィーラントとカントの言説から、特定の共同体から離れることに向かった彼らのコスモポリタニズムの基本的なあり方を確認し、その可能性と問題性を示す。その上でカントの『永遠平和のために』(1795) に注目し、そこに提唱されたコスモポリタンの権利が、離脱を志向する 18 世紀的なコスモポリタニズムの可能性を、きわめて政治的な形態において結実させたものであることを示したい。

2. 「世界文学と人間性」あるいは「多様性における統一」—19世紀におけるコスモポリタニズム言説の一類型をめぐって

西尾 宇広

周知の通り、晩年のゲーテが厳密な定義なしに用いた「世界文学」という言葉は、その意味の曖昧さゆえに多様な解釈を誘発しながら、文字通り世界的な規模で伝播していった (Goßens 2011; 秋草 2020)。その最初期の反応の一例である K・グツコーの論考「二つの世紀の転換点におけるゲーテについて」(1836)は、「国民性の保証」の契機としての「世界文学」が画一的な普遍性とは相容れないことを強調して、ナショナリズムと「世界文学」を相補的な関係の中に位置づけたが、興味深いことにこうした「世界文学」の語り方は、同時代の「国民文学」の語り方とも奇妙な相似形をなす。「村物語」で知られる B・アウエルバッハの文学論『書物と民衆』(1846)では、「主観的」な文学が「地方的」な段階を経て「民族的かつ国民的」な文学に至る、という弁証法的な発展過程が提示され、それが「多様性における統一」という標語のもとに正当化されているからだ。本発表では、晩年の彼がその論理を「世界」という地平に移し替え、多様な「国民文学」が共通の「人間性」によって結ばれる「世界文学」という展望へと帰着した経緯を見据えつつ、19世紀の「世界文学」をめぐるとの議論をコスモポリタニズム言説の一類型と捉えた上で、18世紀に生まれた「よそ者」のための思考が国民国家の形成期に新たな文学的表現を獲得し、ナショナリズムを語るための二枚舌的な修辞法として機能するようになった脈絡の一端に光をあてる。

3. 「世界市民主義」とフォンターネ『エフィ・ブリースト』

磯崎 康太郎

フリードリヒ・マイネッケの『世界市民主義と国民国家』(1908)によれば、超国家的な普遍主義とも称すべき「世界市民主義」は、19世紀後半における国民・民族主義の先鋭化のなかで、本来の対抗原理としての力学的機能を失い、国民主義に取りこまれた論調として表面化することになる。テオドール・フォンターネの『エフィ・ブリースト』(1894-95)においても、「世界市民主義」が一種の大義名分として国民国家と癒着し、経済的活況と相まって国民を熱狂させる様子が描かれている。しかしその一方で、辺境ではひそかにマイノリティの活動が展開されている。多民族が共生する辺境の地ケッセンにおける「異者」の像がドイツ的プロイセン的なものへの批判として機能しているのだ (Neuhaus, 2019)。ただし、この物語世界には、19世紀末頃のドイツ帝国の姿に過去のプロイセンの姿が重なっており、「非同時的なもの」を同時に出現させるという文学的な語りの意味合いについていまだ検討の余地がある。この小説におけるプロイセン的伝統は、ドイツ帝国の現況に投影され、硬直した規範や価値体系と化しているが、ケッ

シンもプロイセン的伝統の残滓として、かつての国民主義がコスモポリタニズムへと転じている例ではなかろうか。国民・民族主義、「世界市民主義」という二項の拮抗、癒着現象の後に生まれてくる、第三のコスモポリタニズム的世界の様相について考察する。

4. コスモポリタンの生活形式としてのアメリカトーマス・マンのコスモポリタニズム思想とアメリカ亡命

山室 信高

世紀末デカダンスの中で成長したトーマス・マンにとってボヘミアンやデラシネといった芸術家像に刻印されたコスモポリタニズムはつとに親しいものだったが、彼がコスモポリタニズムの思想を自覚的に深めるのは19世紀ヨーロッパのナショナリズムが壊滅的な帰結を見る第一次世界大戦中である。『非政治的人間の考察』(1918)ではドイツ市民ないし市民性が単にナショナルな存在形式であるだけでなく、インターナショナルとは一線を画す、超ナショナルなコスモポリタニズムを湛えた存在として打ち出され、戦後もこのナショナルかつコスモポリタンな理念は保持される。しかしナチスによって亡命を余儀なくされると、マンはそのコスモポリタニズム思想を実践に移さざるを得なくなる。すなわちドイツのナショナルな枠組を離脱してなおドイツ市民として世界市民たりうるか、身をもって証すことがマンの亡命の課題となる。そこで実際の亡命地となったアメリカがマンのコスモポリタンの在り方にとっては無視しがたい。アメリカ国籍を得て「私のドイツ人としての特性はアメリカという名の親切なコスモポリスにおいて最適に遇されている」と言うように、マンが奉じるドイツ性に備わるコスモポリタニズムが展開するにはアメリカというコスモポリティックな器を必要とした。本発表では、専ら反ナチズム闘争の文脈で論じられるマンのアメリカ亡命を「コスモポリタンの生活形式」として捉え直し、亡命が強いる「よそ者」の生の批判的ポテンシャルを探る。

5. 亡命が遺したもの—レーヴィットとブロッホのコスモポリタニズム

吉田 治代

20世紀においてコスモポリタニズムは、「人間」の権利や自由、「人類の統一」といった普遍的な理念が、西洋的な伝統であり、従って地域的で限定的なものであるという批判に取り組む必要に迫られる。本発表では、カール・レーヴィットとエルンスト・ブロッホに光を当て、2人の亡命者がそれぞれのやり方でこの問いに取り組みつつ、古代ギリシアに遡る西洋のコスモポリス思想の批判的再獲得を目指していく過程をたどり、2つの哲学的なナラティブの限界と可能性を検討する。レーヴィットにおいて、コスモポリタニズムとの批判的対峙は、「人類の統一性と差異について」(1938)に見てとることができる。抽象的な人類統一の理念を退けつつも、それが危機に瀕している状況に

あって、その統一を「様々に異なる人びとのあいだに」見出そうとしている。レーヴィットのコスモポリタニズムは東洋を古代ギリシアと繋げて〈われわれ〉の中に引き入れつつ、人間存在を包括する自然に調和して人々が生きる共同体を志向する。他方ブロッホが主眼を置くのは、「人間の尊厳」を求める思想としての自然法の遺産相続である。彼は古代から近代までの普遍主義的コスモポリタニズムの規範的側面に合意しながら、普遍的理念によって繋がる〈われわれ〉を拡げていこうとする。脱植民地化の運動をも視野に入れて目指される共同体は、その際、西洋という枠にとらわれるものではない。

ポスター発表 (13 : 00~14 : 30) チャンネル 3

MEDITATIONSÜBUNGEN UND IHRE AKZEPTANZ IM UNIVERSITÄREN DEUTSCHUNTERRICHT IN JAPAN

Luisa Zeilhofer

Achtsamkeit – oder Mindfulness – ist in den letzten Jahren stark in den Fokus der Forschung gerückt. Untersuchungen haben gezeigt, dass Achtsamkeit und eine ihrer bekanntesten Praktiken, die Meditation, neben Entspannung und Stressreduktion auch für das Lernen notwendige kognitive Funktionen wie Aufmerksamkeit und Gedächtnis positiv beeinflussen kann. Zeilhofer (2020) untersuchte den Einfluss von Meditationsübungen auf das Deutschlernen an einer japanischen Universität. Über den Verlauf von zwei Semestern wurden Studenten und Studentinnen in drei Gruppen aufgeteilt: eine Gruppe, die mit Atemübungen meditierte, eine zweite Gruppe mit audio-geführter Meditation, sowie eine Kontrollgruppe ohne Meditation. Noten und Achtsamkeitslevel wurden verglichen, wobei die Meditationsgruppen signifikant höhere Werte im Vergleich zur Kontrollgruppe zeigten. In einer Folgestudie wurden die Effekte der geführten Meditation auch über den Verlauf eines einzigen Semesters festgestellt (Zeilhofer, 2021), wobei andersartige Effekte beobachtet wurden. Gleichzeitig wurde jedoch festgestellt, dass positive Effekte nur dann erzielt werden, wenn die Studierenden die Meditationspraxis akzeptierten (Gryffin, 2014; Mortimore, 2017). Um Meditationsübungen effektiv in den Deutschunterricht zu integrieren, sind eingehende Untersuchungen zur Akzeptanz notwendig. Ziel der vorliegenden Mixed-Methods-Studie war daher, die Akzeptanz von Studierenden gegenüber Meditationsübungen im Fremdsprachenunterricht zu untersuchen. Es werden die quantitativen und qualitativen Ergebnisse zur Akzeptanz von zwei verschiedenen Meditationspraktiken präsentiert.

ブース発表（14:35～16:05）チャンネル3

「生徒の資質・能力を育成するための授業設計 とその評価」—逆向き設計を取り入れたパフォーマンス評価の効果

Die Unterrichtsplanung und die Evaluation zur Entwicklung der Kompetenzen und der Fertigkeiten von Deutschlernenden an der Oberschule -Die Effektivität der auf der Rückwärtsplanung basierten Leistungsevaluation-

池谷 尚美・吉村 創・鈴木 冴子・境 一三

「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」（慶應義塾大学外国語教育研究センター研究事業）は、令和2年度で4年目を迎え、関東圏を中心にした複数の高等学校で、多言語（中・韓・西・仏・独）の教師が協働して研究を進めている。本発表の目的は、本事業のドイツ語研究担当者による、研究課題・年間計画や単元案の実践・効果検証と評価を中心にした成果を報告することである。

新学習指導要領では、「育成を目指す資質・能力」という観点からカリキュラムを編成する方針が打ち出され、その資質・能力の3つの柱は、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等、と分類されている。発表者は、生徒の資質・能力を伸ばすためには、多角的な観点から評価を行う必要があり、その一つの手段として、パフォーマンス評価が効果的だと考えた。パフォーマンス評価を授業に取り入れる際には、ウィギンスとマクタイによる「逆向き設計」論に基づいたパフォーマンス課題を考案し、その評価手段としてルーブリックを採用している。

発表では、令和元年度、または令和2年度における発表者の実践に基づき、年間目標、単元目標やその授業計画を中心にした取り組みを紹介する。その際、生徒へのアンケートや授業担当者による授業観察等を通じ、資質・能力の涵養に対する効果を考える。また、参加者と、高等学校における今後のドイツ語教育について意見交換を行いたい。

口頭発表：語学（16:10～17:25）チャンネル3

司会：森 芳樹／稲葉 治朗

1. 1840年から1945年に至るドイツの日常的「文字景観」

— 書籍・新聞・雑誌におけるドイツ文字とラテン文字の使用実態を探る

大倉 子南

ドイツ文字 (Fraktur) とラテン文字 (Antiqua) は、朝読む新聞の紙面であれ、街角で目にする広告塔であれ、日常生活のなかで独特の視覚的情景 (「文字景観」) を織りなしてきた。本発表は、1840年頃から1945年までのこの文字景観を再構成すべく、書籍・新聞・雑誌において二つの文字種が各々どれほどのシェアを占め、その使用実態がどのような要因に規定されたのかを調査するものである。先行研究では、両文字種をめぐる議論については詳しく論じられているが、使用実態はほとんど調査されていない。

発表者の分析結果によると、ドイツ帝国が成立した1870年代において書籍にドイツ文字優勢からラテン文字優勢へのシフトが確認される。医学、数学、経済学、心理学の分野の書籍においてラテン文字使用が顕著であることは、数値に関わる分野とラテン文字との親和性を示唆する。新聞については、経済に関わる記事においてラテン文字使用が際立っている。これは、国際性との関連が考えられる。ある株式新聞は、第1次大戦下の「国民感情の高まり」に配慮して、1916年にラテン文字使用をやめドイツ文字に切り替えた。ここには、ナショナリズムとドイツ文字との親和性が示唆される。1941年1月に、ドイツ文字を廃して漸次ラテン文字に変更せよというヒトラー名の通達が出されたが、ナチ党直轄の雑誌においてすら一斉には切り替えられず、切り替えには数ヶ月から数年単位の時間差が認められる。また、1945年の最終号までラテン文字に切り替えなかった雑誌もある。これには、戦時下における印刷技術の面での切り替えの困難さという実際的な理由が想定される。

2. 低地ドイツ語における疑似並列構文について

覚知 頌春

本稿で扱う対象は、低地ドイツ語の疑似並列構文 (Pseudokoordination) である。疑似並列構文では、2つの動詞が並列接続詞 *un* (dt. *und*) で結ばれ、同じ時制・人称変化を示す (*Nu füng he an un snack vun fröher* „Nun fing er an und redete von früher.“ Höder 2012: 186)。この構文は、主語を反復できない点、並列要素を入れ替えられない点、2つの出来事ではなく単一の出来事を表す点で通常の並列文と異なる。本発表では、低地ドイツ語の疑似並列構文に関して、この構文が統語的に並列構造を持つことを主張する。発表者は、2018年11月から2019年4月にかけて、ドイツのシュレーズヴィヒ＝ホルシュタイン州において、方言話者を対象にアンケートを用いて、本構文で可能な第一要素と統語的操作を調査した。その結果、第一要素に関して、始動相と進行相を表すアスペクト動詞が容認された一方で、終止相のアスペクト動詞 (*ophören*, dt. *aufhören*) が低い評価を受けた。これは、*ophören*のスコープが、並列構造のため第二要素に及ばないためであると考えられる。統語的操作に関し、アンケートでは、2番目の動詞句からの目的語の取り出しを含む例文が、低い評価を受けた。これは、並列構造において一方の並列要素からの取

り出しはできないとした並列構造制約に違反しないため、並列構造の根拠となる。従属構造を持つとされるスウェーデン語の疑似並列構文では、目的語の取り出しが可能である。

第2日 6月6日(日)

シンポジウム III (10:00~13:00) チャンネル1

Edition から Dokumentation、そしてその先へ —編集文献学の射程—

Edition, Dokumentation – was kommt danach? Zur Reichweite der Editionsphilologi

全体要旨

司会：明星 聖子

ブローチ版から批判版、そして写真版へ。カフカ全集のこの〈進化〉の過程は、近代文学研究が基づくテキストがたどる発展のいわば典型である。作家の死後、彼の身近にいた人物が遺稿の編集に乗り出す。普及を目的としたテキストの出版によって作家の評価が高まり、学術研究の対象としての重要性が十分広く認識されると、いつしか精鋭の研究者チームによって批判版の編集が行われる。さらに、ある時期からは手書き原稿等の遺稿資料をそのまま複製した写真が次々と公表されるようになる。

EditionからDokumentationへ。ここ数十年の学術版編集の方向性は、このようなフレーズでまとめて語ることができるだろう。編集という行為は、いかに客観性を装おうが、必ず編集者の解釈を伴う。その解釈をある種の恣意と捉えるなら、編集の手ができるかぎり加えられていないもの、できるかぎり資料そのものに近いもののほうが、学術研究のベースにはふさわしい。このある意味もつともなロジックによって、編集文献学の理論は、「正しさ」の基準を、作者の意図にいかにも忠実に編集するかから、残された資料をいかに忠実に再現するかへとスライドさせていった。この転換の背景には、近年の急速なICT技術の発展がある点も着目すべきだろう。画像の大量流通をほぼゼロコストで実現する現在の情報メディア環境は、資料の写真のパブリッシュを従来よりはるかに容易にした(明星・納富2015)。

では、私たちの研究の基盤となるテキストとは、それらドキュメントされた資料であるべきか。たしかに、手書き原稿が忠実に文字起こしされた転写、あるいは複製された写真が、研究者の手に届けられることは、歓迎されてしかるべきだろう。しかし、そこで満足してしまっているのか。編集文献学の議論は、Dokumentationのその先を本格的に

思考する時期に来ているのではないか。

私たちのシンポジウムは、この問いに向き合うことを目的とするものである。まず、森林は、シャイベの論考を基に、学術版編集の伝統的な規範概念である「史的批判版」の理論的検討を行うことで、上記の方向性を確認する。次に二藤は、シュレーゲルの遺稿の編集史を概説しながら、最近実現されたドキュメンテーション例を元に、従来の版との比較検討から、研究手法と基盤テキストの形態との関連の重要性を確認する。田邊も、ベンヤミンの遺稿の編集史を概説したうえで、最新の批判版全集の意義と限界を明らかにし、さらに一步進んでその限界の乗り越えを思考する。矢羽々は、ヘルダーリンという史的批判版全集の先駆例を元に、30年以上前に実現していたドキュメンテーションがその後の研究に与えた影響、そして現状と今後の展開への見通しを明らかにする。明星は、カフカを例に、再度上述の流れを確認したうえで、自らの実践例をもとに、編集と解釈をめぐるこれからの思考、編集文献学的な見地に立った今後の研究のあり方についてひとつの新しい可能性を示す

1. 史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe) とは何か

—ジークフリート・シャイベの理論を中心に—

森林 駿介

「史的批判版」は、これまでのドイツ編集文献学において、あるべき編集の理想像として多くの議論がなされてきた。今日にいたるまで「史的批判版」の名を掲げる著作集は出版され続けており、現在でもその重要性は失われていない。だが他方で、個別の読者や研究者の関心に応じた編集の多様化が叫ばれている近年の議論においては、「史的批判版」はしばしば批判の対象となっている。

本発表が取り上げる東ドイツの文献学者ジークフリート・シャイベは、一貫して「史的批判版」に言及しその理論化に取り組んだ人物である。とはいえ、彼の理論的考察が正面から取り上げて分析されることはこれまでほとんどなかった。そこで本発表では、シャイベの議論を3つの時期に分けて検討する。まず、「史的批判版」の理論的基礎付けを目指して書かれた1970年代の論考、次に、「史的批判版」に向けられた批判に応じるかたちで執筆された90年前後の論考、そして最後に、編集の基本モデルやその多様な可能性についてひろく論じた90年代後半の論考を取り上げる。70年代から90年代末にいたるまでのシャイベの議論を丹念に追うことで、シャイベにおいて「史的批判版」の理念がどのように構想され、そしてその位置づけが時代の変化ともどのように変化していったのかを明らかにする。こうして本発表では、シャイベを例に、ドイツにおける「史的批判版」に関する議論の展開を整理することを目指す。

2. フリードリヒ・シュレーゲルの遺稿断章群とその編集・出版の歴史

—ヴィンディッシュマン、J・ケルナーから E・ペーラーへ—

二藤 拓人

本発表の目的は、第一に、フリードリヒ・シュレーゲル研究における難題の一つである彼の膨大な量の覚書（以下、遺稿断章群）の編纂に携わった各時代の編集者（ヴィンディッシュマン、ケルナー、ペーラー等）に着目しながら、遺稿の出版経緯や時代背景を考察すること、第二に断章の編集方法の変遷とその際の問題点を具体例とともに明示することにある。

戦後よりシュレーゲル研究の一次文献として定着したペーラー編集主任の『批判版全集』（1958-）には、遺稿断章群にみられる独特の筆記法の編集・転記方法に関する問題が指摘されてきた。例えばこの批判版では各断章がルビ番号の振られたアフォリズムとして個々に独立して転記されているため、不断に書き連ねられた思索の連続体としてのダイナミズムが失われ（Erlinghagen 1997; Müller 2015）、本文と欄外の二段で構成される手稿紙面の特徴的なレイアウトが再現されていない（Benne 2015）のである。先行研究の批判的議論から浮上する批判版編纂上の諸問題—同時に断章という文学表現そのものが孕む問題—に対する解決策の一つは、自筆手稿がそのまま可視化された複写版『シュレーゲリアーナ』（2015-）に求められよう。本発表では近年の複写版出版に対する展望を述べつつも、むしろそこに至るまでの遺稿断章群の編集・出版経緯に焦点を当て、その歴史を再構成することで、ドイツ語圏における「史的批判版」の理念形成の一過程を提示したい。

3. 書物の「その後の生」とはなにか

—ベンヤミン『1900年ごろのベルリンの幼年時代』編集・出版を例に—

田邊 恵子

『1900年ごろのベルリンの幼年時代』（以下、『幼年時代』と略記）は、1932年～38年にわたってヴァルター・ベンヤミンが加筆修正を繰り返した結果、複数のヴァージョンが成立した。ただし彼は本作品を〈全30篇からなる一冊の書物〉として出版することを一貫して意図していた。この形式に合致するのが最終稿パリ・タイプ稿（1938年）であるが、本ヴァージョンは1981年になってようやくアガンベンによって発見されたため、それまで『幼年時代』の全容は不明のままに留まっていた。

『幼年時代』は1950年に、アドルノが初期手稿を底本に編集した一冊の文庫本として出版された。しかし2019年に出版された新批判全集版をもととした研究が進む現在、このアドルノ版をはじめとして戦後に出版された諸ヴァージョンは、ベンヤミンの意向を無視したものと否定的にとらえられている。ただし、ベンヤミン自身が作者の死

後に他者の介入的な作業によって生成される「死後の生」を重要視していたことを踏まえば、『幼年時代』に初めて書物のかたちを与えたアドルノの編集者としての仕事は無視されるべきではないだろう。

本発表では戦後から現在にいたる『幼年時代』の資料整理、編集、出版の経緯に焦点をあて、ベンヤミンが言う「死後の生」はいかにして可能なのかという問いに対峙することとしたい。

4. ヘルダーリンに見る史的批判版

矢羽々 崇

Friedrich Hölderlin (1770-1843) の作品出版を見ると、20世紀に入ってから詩人に対する評価が高まり、その流れのなかで史的批判版が4つ編集されるという特異な歴史を持っている。これらの版は、史的批判版の歴史における「EditionからDokumentationへ」という流れを端的に示している。

第二次世界大戦前にはN. v. Hellingrath (1888-1916) およびF. Zinkernagel (1878-1935) による史的批判版、戦後にはF. Beißner (1905-1977) の版およびD.E. Sattler (1939-) による版が発表された。それぞれがお互いをライバル視し、競合するかたちで編集された。

Hellingrath版 (1913-1923) とZinkernagel版 (1914-1926) では、作品の浄化と、詩人の再評価が目指された。19世紀の諸版に見られる編者の恣意とテキスト改竄を批判しつつ、両編者は、詩人の手稿に立ち戻ることで、詩人の再評価を目指した。

Beißner版 (1943-1985) とSattler版 (1975-2008) では、テキストの「史的」過程、すなわち成立の諸段階を可視化することが目指された。読者は、作品の成立を自ら追体験することが可能となった。

テキストのDokumentationへと至った史的批判版の次の可能性を見せたのは、イタリア語に詩を翻訳し、詳細な注釈を付して編集したLuigi Reitaniである。彼は先行する諸版では満足せず、翻訳のためにあらためてテキストを編集し、詳細な注釈を付した。この版は、テキスト編集の新たな地平を拓く可能性を持っている。

5. 「翻訳可能なテキスト」としての新しいカフカ編集の可能性

明星 聖子

カフカが生前「作品」として公表せず、未完成のまま遺された手書きの原稿。批判版、写真版とそれらのドキュメンテーションが進む現状は、研究者にとってはありがたいものだが、それだけでいいのか。

ブローチ版に替わる普及版として、批判版のテキスト篇だけを独立させたテキストがすでに広く流通している。それを手にする一般読者が、批判版の資料篇に収録されたヴ

ァリアント情報にふれることはない。写真版も基本的に研究者向けのものである。ドキュメンテーションの成果のほとんどは、研究者以外に伝えられることはない。ドイツ語圏の外では、この問題は「翻訳」の問題として立ち上がる。草稿上の削除や加筆の跡は、本質的に翻訳不可能である。これらヴァリエーション情報だけでなく、批判版や写真版で詳細に解説されている創作過程と草稿の物理的状態との複雑な関連も、一般には伝えられず、翻訳されることもない。

研究者と一般読者を結ぶ橋を編集によって架けることはできないか。発表者はすでに、「翻訳可能なテキスト」を編集するというプロジェクトを開始し、いくつか論考を発表している（明星・森林・冨塚2019、森林2020、明星2020）。とくに最新の論考では、本シンポジウムのテーマにある「その先」を「第三世代」という独自のコンセプトで表現して、新たな議論の可能性を探っている。本発表ではこれらを概説し、プロジェクトの最新状況を紹介しながら、現段階の考察の到達点を示したい。

口頭発表：ドイツ語教育（10:00～12:35）チャンネル2

司会：Stefan Keppler-Tasaki／高田 梓

1. Geschlechtergerechte Sprache: Warum sich auch der DaF-Unterricht in Japan damit beschäftigen sollte

Angela Lipsky

Gesellschaftliche Forderungen nach Gleichbehandlung der Geschlechter haben in den letzten Jahren den deutschen Sprachgebrauch stark beeinflusst und zur Verbreitung verschiedener Formen geschlechtergerechter Sprache (*Studierende, Wissenschaftler*innen, Besucher_innen* ...) geführt. Auch wenn aktuell eine hitzige Debatte über das Pro und Kontra des Genderns im Gang ist, ist dieser Sprach- und Bewusstseinswandel nicht mehr aufzuhalten: Dieses Jahr hat der Duden online seine Definitionen von männlichen Personenbeschreibungen geändert und verzichtet nun auf die umstrittene „generische“ Lesart von Maskulina. In den Medien werden verstärkt inklusive Ausspracheformen (Sprechpause, um Genderzeichen hörbar zu machen) erprobt.

Ein am authentischen Sprachgebrauch orientierter DaF-Unterricht kann diese Entwicklungen nicht ignorieren. Die derzeit verfügbaren Lehrwerke enthalten jedoch meistens keinerlei Hinweise dazu und spiegeln den Variantenreichtum der aktuellen Sprache kaum wider.

In dem Vortrag möchte ich erläutern, warum es sinnvoll ist, im DaF-Unterricht für das Thema zu sensibilisieren und auf einige mit dem Sprachwandel verbundene Herausforderungen vorzubereiten. So sollten sich Lernende in Hinblick auf die Rezeption authentischer Texte in der

Heterogenität des Sprachgebrauchs zurechtfinden können. Bei der Sprachproduktion sind sie z.B. mit der Frage nach der „richtigen“ Schreibweise oder mit Schwierigkeiten bei der Übersetzung nicht geschlechtsmarkierter Personenbezeichnung aus dem Japanischen konfrontiert.

Darüber hinaus fördert die Reflexion über die Beziehungen zwischen Sprache, Geschlecht/Gender und Gesellschaft nicht nur die Sprachbewusstheit, sondern enthält auch eine wichtige landeskundliche und interkulturelle Komponente, auf die ich ebenfalls eingehen werde.

2. 日本国内におけるドイツ語学習者の **Willingness to Communicate**: 授業内要因と個人差要因の視点から

山田 真実

本研究は日本人ドイツ語学習者の、ドイツ語での **Willingness to communicate** (以下、WTC) にいかなる要因が影響しているのかを明らかにすることを目的としている。第一言語でのコミュニケーション研究において提唱された概念である WTC は、「他者とのコミュニケーションへと向かう傾向」(McCroskey & Richmond, 1987) と定義され、様々な個人差要因との関連性について調査がなされてきた。第 2 言語習得研究に WTC の概念が導入されて以降は、従来の個人差要因に加えて学び手の学習環境や社会情勢といった状況要因が学習者の WTC に及ぼす影響を加味した調査の必要性が唱えられるようになった (MacIntyre et al., 1998)。

上記のような先行研究の流れを踏まえ、本調査では日本人ドイツ語学習の WTC が、学習者の状況要因(「クラスルーム内要因」と個人差要因(「コミュニケーションへの自信」、「ドイツ語学習のオリエンテーション」、「ドイツ語学習の動機づけ」)に影響されるのであるか否か、またどのように影響されるのであるかを、WTC の仮説因果モデルの検証を通じて解明しようと試みた。検証の結果、「コミュニケーションへの自信」と「クラスルーム内環境」から WTC への有意なパスが見られ、この 2 つの要因が学習者の WTC に直接効果を与えていることが明らかとなった。また、「ドイツ語学習の動機づけ」及び「ドイツ語学習のオリエンテーション」については、WTC への直接効果は見られなかったものの、他の要因を介して間接的に学習者の WTC に影響を与えていることが示された。これらの結果より日本人ドイツ語学習者のドイツ語でのコミュニケーション意欲には、個人差要因と状況要因の両者ともが関与し働きかけていることが明らかとなった。

3. Sprachhandlungen modellieren für Deutsch als Fremdsprache. Ergebnisse einer korpuslinguistisch-frequenzbasierten Studie zur Distribution und Verkettung sprechaktindizierender Muster

Joachim Scharloth

Seit der kommunikativ-pragmatischen Wende ist daher die Vermittlung linguistischer Korrelate für Sprechhandlungen zentrales Ziel jeden Fremdsprachenunterrichts. Für Deutsch als Fremdsprache haben Glaboniat et al. (2002) auf der Basis von Baldegger et al. (1980) eine Taxonomie von 244 Sprechakttypen erarbeitet und eine Liste mit mehr als 4000 typischen sprachlichen Muster für ihre Realisierung. Mit dem Ziel erstellt, den Europäischen Referenzrahmen für Deutsch zu konkretisieren. Bei allen Vorzügen von "Profile Deutsch" gibt es jedoch auch einige Leerstellen:

- (1) Die Ausarbeitung enthält keine Informationen zu Gebrauchshäufigkeiten.
- (2) Sprechakttypen und ihre Realisierungsmuster werden atomistisch dargestellt. Sprechaktsets und Adjazenzmuster werden nicht behandelt.

In meinem Vortrag werde ich die Ergebnisse eines JSPS-geförderten Projekts vorstellen, das die genannten Mängel auf einer breiten empirischen Basis adressiert. Im Rahmen des Projektes "Modelling Linguistic Practices for Learners of German: A Data-driven Approach to Speech Act Sets and Speech Act Sequences", habe ich anhand eines Korpus bestehend aus Interaktionen in Online-Foren mit rund 1,5 Mrd. Wörtern untersucht,

1. welche sprachlichen Muster häufig zur Realisierung bestimmter Sprechakttypen verwendet werden,
2. in Verbindung mit welchen anderen Mustern sie verwendet werden (speech act sets) und
3. ob sich typische Sequenzmuster identifizieren lassen.

Die Ergebnisse können auf basic-german.com eingesehen werden.

4. Sehen und Sprache - die Vorteile binokularen Sehens für den Spracherwerb (Deutsch /Englisch)

Markus Rude / Will Hall

Die Evolution unseres Sehapparats reicht weit zurück, wogegen Schriftsprache relativ jung ist. Nach Zeki (2003) ist unsere Fähigkeit zur Informationsaufnahme aus Sprache gegenüber der aus dem Sehen unterentwickelt. Wir erkunden daher zwei neue Möglichkeiten, Bedeutung aus Texten durch binokulares Sehen zu extrahieren: 3D-Textdarstellungen (3-dimensionale) erlauben das Gruppieren und „Entwirren“ nahe beieinanderstehender Textteile, BR-Textdarstellungen (*Binokulare Rivalität*) das „Verstecken“ von Textteilen; Binokulare Rivalität bedeutet die perzeptive Alternation zwischen verschiedenen, beiden Augen gleichzeitig dargebotenen Bildern. Drei Thesen verknüpfen hierbei Sehen und Spracherwerb: (1) Sprachvermittlung nutzt Lehrtexte mit zusätzlicher Information (Wörterklärungen ...) und reduzierter (Lückentexte ...); beide

Textarten könnten durch binokulares Sehen erzeugt und für den Deutschunterricht eingesetzt werden. (2) Der binokulare Sehprozess involviert willkürliche Prozesse (bewusste Sakkaden ...) und unwillkürliche (Mikrosakkaden ...). Er ähnelt damit dem Sprachlernprozess, der ebenfalls bewusste und (zunehmend) unbewusste/automatisierte Prozesse beinhaltet; binokulares Sehen könnte daher den Fremdsprachenerwerb unterstützen. (3) Die Datenfluten beim Sehen und Lesen werden nur durch systematische Strukturierung bewältigt; die Entwicklung des Leseverstehens könnte durch gezielte Nutzung binokularen Sehens gefördert werden. Nach Thesenaufstellung und Begründungen, unterstützt durch Anaglyphenbilder, möchten wir mögliche Sprachlehranwendungen diskutieren. ZUR 3D/BR-WAHRNEHMUNG BENÖTIGEN SIE EINE CYAN-ROT-FILTERBRILLE, DIE WIR IHNEN KOSTENFREI POSTALISCH ZUSCHICKEN, WENN SIE BIS 10 TAGE VOR VORTRAGSTERMIN EINE E-MAIL AN rude.markus.fn@u.tsukuba.ac.jp SCHICKEN.

口頭発表：文学 I (10:00~12:35) チャンネル3

司会：竹峰 義和／葛西 敬之

1. クレメンス・J・ゼッツ『ケーファイと文学』からみるポスト真実時代の第四の壁 犬飼 彩乃

古代ギリシャから現代にいたるまで、眼前の現実（と思われるもの）をいかに認識し表現するかは芸術家たちの主要課題のひとつであり続けてきた。内的真実を追求したモダニズムを経たポストモダニズムでは「大きな物語」が終焉し、客観的事実の相対化がなされたが、今世紀では技術革新とコミュニケーション形態の変化が文学のみならず社会全体に大きな影響を与えている。なかでも事実の確認をないがしろにした言説の跋扈は顕著であり、その代表格ともいえる「ポスト真実の政治」についてアメリカの文芸評論家ミチコ・カクタニは、ポストモダニズム文学の影響を指摘した。

クレメンス・J・ゼッツの2019年バッハマン賞オープニング・スピーチ『ケーファイと文学Kayfabe und Literatur』も、プロレスにおける「ケーファイ」を文学における「第四の壁」になぞらえ、カクタニと同様に文学と社会の関係を明らかにした。ただし、ゼッツは政治におけるポストモダニズムの潮流を追うというより、虚構と事実の交錯という文学的現象に注目している。これは戯曲『国際連合』（2017）での演出の問題、小説『インディゴ』（2012）のメタフィクション構造、『ポットー作者不在のインタビュー』（2018）の作者論など、作家がこれまで発表してきた文学作品のテーマとも通底する。本発表で

は、当該講演を端緒として作家の考える「第四の壁」とその問題意識の所在を探る。

2. 大学生像の変遷

—グリューフイウス『カルデニオとツェリンデ』とアルニム『ハレとエルサレム』から

小崎 肇

グリューフイウスの『カルデニオとツェリンデ』(1657)を翻案したアルニムの『ハレとエルサレム』(1811)は、その技法によって十八世紀から十九世紀への転換期の同時代性を強く映し出している。

グリューフイウスは『カルデニオとツェリンデ』においてカルデニオを、肥大した理性を具現する、尊大な大学生とした。そこには、ルネサンス期の理性崇拜からバロック時代における理性への疑いが生じたという背景がある。グリューフイウスがカルデニオをボローニャの大学生としたのは単に偶然ではなく、批判的に取り上げるべき理性を象徴させるためだっただろう。これに対しアルニムの『ハレとエルサレム』に登場するカルデニオは若く優秀な私講師として、また学生オルデンのリーダーとして大学生の上に立つ存在である。さらにグリューフイウスの戯曲ではほとんど取り上げられていない学生生活の場面が作中に盛り込まれている。これは、時代の変化にともなう大学生の社会的な地位の変化、また文学において大学生のもつ意味が大きく変化したことを示しているといえるだろう。

本発表は、両作品の大学生像に着目し、時代背景を考慮しながら比較することで、一世紀半の間に大学生がどのような変化を遂げたのか、さらにアルニムの描く大学生像が当時、急速に存在感を増した大学生という存在とどのように関連しているのか、これまであまり取り上げられることのなかった 1800 年前後の大学生像への新たなアプローチを試みるものである。

3. 『ミツバチ・マーヤの冒険』における「ミツバチとスズメバチの戦い」について —戦争とベストセラーのかかわりに関する一考察

竹岡 健一

W・ボンゼルス『ミツバチ・マーヤの冒険』(1912年)は児童文学の名作として有名だが、意外なことに、本作品が世に認められる契機は第一次世界大戦にあった。本発表では、「ミツバチとスズメバチの戦い」を中心に考察を加えることにより、その理由を探る。

はじめに、本作品の需要が 1917 年以後著しく増加したという事実と、その発端が前線兵士の間での読書にあったとする見解を跡づける。続いて、その有力な原因とみなされる愛国主義的な解釈の可能性について、三つの観点から詳しく掘り下げる。つまり、ミツバチの女王に皇帝ヴィルヘルム二世が投影されていること、ミツバチとスズメバチの対決に第一次世界大戦前夜のヨーロッパの政治状況が反映されていること、およびミツバチの生態に関する通俗的な見方が君主的な国家観を擁護するために濫用されていることである。

だが、作品全体の多彩な内容や戦争末期のドイツの戦況などを考慮すると、こうした愛国主義的な解釈では、前線兵士の間で本作品の人气が急騰した理由を説明しきれない。そこで最後に、これとは正反対の側面に目を向ける。すなわち、死にゆくスズメバチの士官に対してマーヤが見せる慈悲の心と、スズメバチの指揮官が戦争終結の決断のさいに見せる文民的な理性である。ドイツが敗戦へと向かう中で過酷な状況に置かれた前線兵士の胸を打ったのは、現実の戦争では十分に発揮されなかった、こうした崇高な人間的態度の描写ではなかったか。

4. Literarische Wahrheit zwischen Fakt und Fiktion. Ein Bestimmungsversuch.

André Reichart

In den Zeiten von Corona-Verschwörungstheorien, alternativen Fakten und Internet-Echokammern ist ein Problem erneut in die öffentliche Diskussion gerückt, das schon seit vielen Jahren auch in der Literaturwissenschaft untersucht wird: Das Verhältnis von Wirklichkeit und Fiktion. Denn literarische Texte erzeugen Welten, die sich als fiktional generieren und zugleich Aussagen über die Wirklichkeit treffen. Narratologisch betrachtet lassen sich ihre Mikro- und Makrobereiche als regel- und ordnungsbasiert beschreiben. Über ihre Struktur weisen Texte durch bestimmte Sachverhalte und Zusammenhänge, bis hin zum Handeln der Figuren, Dinge als wahr oder richtig, falsch oder unmoralisch aus. Im diegetischen Kosmos wird somit sowohl lokal als auch global Wahrheit geschaffen. In der Auseinandersetzung des Lesers mit diesen erzählten Welten findet nun ein permanenter Abgleich zwischen der subjektiven und der textinternen Wahrheit statt. Der Gedanke der Authentizität spielt bei der Text-Rezipienten-Interaktion eine entscheidende Rolle. Ausgehend von Goodmans Überlegungen der Welterzeugung, Genetts Fiktionsakten und Waltons Make-Belief-Ansatz soll versucht werden ein Modell vorzustellen, das sich auf eine der grundlegenden Funktionen der Literatur als sekundäres, modellbildendes System konzentriert, wie es Lotman definiert hat. Im Zentrum steht die Frage nach der Möglichkeit zur Abgrenzung der ‚literarischen Wahrheit‘ zu anderen Konzeptionen von ‚Wahrheit‘. Entscheidend hierbei ist die Unterscheidung zwischen Wahrheit und Wirklichkeit, weil die literarische Wahrheit

einen anderen Bezug zur Wirklichkeit aufweist aufgrund des fiktionalen Charakters der Erzählwelt.